

住区への愛着に関する文献研究

園田, 美保
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/880>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 3, pp.187-196, 2002-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

住区への愛着に関する文献研究

園田 美保¹⁾ 九州大学大学院人間環境学研究所

Review of the research on attachment to residential area

Miho Sonoda (*Graduate school of Human-Environment Studies, kyushu University*)

This review focuses on studies on place attachment (PA), in particular as it relates to residential areas, as viewed from various research fields that draw on an approach from the human side of understanding of “dwelling” behavior, as the whole of our daily activities. First, I classified the definitions and main viewpoints of some studies on PA while discussing their dimensions and important aspects. Next I examined some concrete questionnaire items used in investigating PA in a discussion of PA as experience. I then touched on the relation of PA with place identity. It was found that most definitions of PA had the meaning of “a positive affective bond between individual and the place,” and that the cognitive, behavioral, cultural, and temporal aspects were emphasized, and, moreover, that security and comfort were implied. Furthermore, it was suggested that PA constituted experience mainly as the feeling of unity of self and place as a consequence of a weakened separation between them. Finally, some arguments for the necessity of more research on PA in Japan and expectations toward an examination of the temporal dimensions and qualities of PA were mentioned.

Keywords: place attachment, place identity, residential area, review

私たちは家に住むと同時にまち、固有の地域にも住んでいる。しかし、一つのまちに生まれ育ち、定住する生活様式が主である時代や地域に比べ、現在の都市においては住民の多様性、エッジの曖昧化などから、従来の分かりやすかった共同体 (community) は読みとれない。住民の流動性が高くなるにつれて、住民間で「場所の意味 (sense of place)」はより部分的、個人的になる (Hay, 1998)。これに似たことを Winderman (1995) は、私たちが「同じ都市に居住しながら同じ場所にはいない」と表している。家を持つことで、生活の満足度や近隣活動への参加、住区の集まりへの参加が高くなることが報告されているが (Rohe & Basolo, 1997)、裏を返すと、賃貸や分譲などでまちに住む場合、住区への関与度は低くなる事がうかがえる。

ここで場所とは特別な意味づけがされており、従来地理学で行われてきた「場所 (place)」への含意が採用されている。すなわち、英語圏での「場所 (place)」と「位置 (locale)」との違いに表れているように、社会的文脈、感情面、価値観、関わりが想定されている地理的領域である (Hay, 1998他参照)。また、日本語ではこのような意味が込められた地理的領域として田村 (1987) の「まち」があげられる。現在のまちづくりの流れに大きく貢献した田村 (1987) は、「身近な実感として感じられる領域」であり、「変化しながら、次第に蓄積された総体」という意味をひらがなでの「まち」に込め、まさしく「人

間の側から見た単位」としてとらえようとした。

そのように場所との関わりや意味づけを想定し、人間側からその関わりにアプローチする方法として、場所への愛着 (place attachment) という術語を使った研究から学ぶものは多い。「場所への愛着 (place attachment または attachment to place)」は“人と特定の環境との間の感情的な絆 (emotional bonds)”であると多くは言い表される (Shumaker & Taylor, 1983 ; Altman & Low, 1992 ; Taylor, 1996 ; Hidalgo & Hernández, 2001 ; 他)。

私たちはある特定の場所に住んでおり、その土地に対しては何らかの感情的なつながりが認められる。住まうということ Bollnow (1963) はまず“人間が自分の家の中で生活するその仕方を、住まう (wohnen)”と言いあらわし、考察を始めているが、“都市はまさに大規模な家屋にほかならない”と、都市の場合にも住まうことの本質を見出ししている。更に、“住まうことのある特定の位置に、そこにふさわしいものとして適合し、そこに根を下ろし、そしてそこでくつろいでいることである”と考察し、メルロ・ポンティの“habiter” [住まう] という語による表現の中には住居と居住者の引き離しがたい統一が考えられていることから、“居住するということ”は、“一つの全面的に信頼し了解してむすびついている形式を意味している”と述べている。この考え方によれば、深い意味での住まうという現象は場所への愛着という現象と多大な重なりをもち、肯定的なものも否定的なものも含め、何かしらの絆を住区に対して感じる事こそが、その土地に“住まう”状態であるとも考えられる。つまり、我々の日常的な行為の総体である“住まう”という

¹⁾ 本研究をまとめるにあたり、南博文先生、丸野俊一先生に貴重なご助言を頂いたことを深く感謝いたします。

行為を理解する場合、場所への愛着という観点から見ていくことはその深い理解にとって有用であることがうかがえる。

これまで“場所への愛着”に関する研究は実に多彩な領域の研究者によって注目され、それらは哲学、地理学、社会学、建築学、文化人類学そして心理学といった分野に及び、様々な視点と方向性を持った研究が重ねられてきている。しかし、その多様性ゆえに体系的な研究領域を形成せず、個々の研究がそれぞれ独立した流れをもつ。また、環境行動学の“全体論”的もしくは“システム論”的志向性から、特有の文化的背景を前提として考慮した上での成果が多くみられるため、新たなフィールドへ適用する場合は慎重でなければならない。

そこで本稿では、そういった場所への愛着に関する研究を住区という領域を主な対象とし、概観を試みる。まずその定義について整理し、次に場所への愛着研究と現象学的アプローチとの結びつきと、場所への愛着に関わる諸側面および具体的内容についてとりあげ、最後に場所への愛着に関係する場所アイデンティティ、場所の意味の研究とともに、今後について考察を加えたい。

1. 場所への愛着とはどのようなものか

1.1 場所への愛着の定義と着目点

先に触れたように、“場所への愛着”研究は多領域の基盤をもち、様々な側面があげられる (Low & Altman, 1992)。よって、まず初めに“場所への愛着”の定義について整理を行う。

場所への愛着の定義として最も端的に表現されているものが“人間と場所の絆 (the bonding of people to places)”であろう。これは1992年刊行の本“*Place Attachment*” (Altman & Low) の中から現在最もよく引用されている。この定義に最大公約数的に“感情的な”という意味が加わり、“人間と場所との間の感情的なつながり”という定義がほとんどの研究の中でみられる (Riley, 1992; Rubinstein & Parmelee, 1992; Kaltborn, 1997; Hidalgo & Hernández, 2001; Jorgensen & Stedman, 2001; 他)。また、Shumaker & Taylor (1983) の“個人と住環境との間の肯定的で感情的な絆もしくはつながり”のようにさらに“肯定的な”という意味が加わる事も多い (Taylor, 1996; Mesch & Manor, 1998; 他)。これらは合わせて“個人と場所との間の (肯定的で) 感情的な絆もしくはつながり”と表現できる。

また、上記の定義に場所への愛着の諸側面が加わる場合も見受けられる。例えば、Brown & Perkins (1992) の“肯定的に体験された絆を含み、人と環境との行動・感情・認知的なつながりから時間を経て発達する”やLow (1992), Fried (2000) など、時間軸、認知、文化、家族や民族、共同体といった側面を含み込んだものが見られ

る。

更に、場所への愛着がもたらす効果までもが先に考慮されている場合もあり、McAndrew (1998) の“個人と居住環境との間の肯定的なつながりで、そのつながりは心地よさや安心感を生む”という記述がSugihara & Evans (2000) にも同じように採用されている。これらの研究はテーマの中心に場所への愛着がすえられ、より詳細に場所への愛着を吟味する目的を持った研究である。

これに対して、場所への愛着を説明変数や関連する変数の一部として操作的に利用している研究もみられる。Hull (1992) は場所と自己のイメージ一致をテーマの中心にすえ、その効果として場所への愛着の促進をとりあげている。ここで場所への愛着は“そこに住もうとする程度”という内容に置き換えられており、厳密に用語を当てるとすれば“居注意志”が適当であると思われる。同じようにWilliams & Roggenbuck (1989) が“個人がどの程度特定の環境セッティングに価値をおき同一化しているか”を場所への愛着として扱っているが、これも“場所アイデンティティ” (後述) の方が適当であると思われる。このように、各研究の主眼となる目的に対して、場所への愛着が一つの関連する変数として定義されている場合もしくは内容のうち主要なテーマに合った特徴が強調されている場合が見受けられるが、これらはむしろ一般用語として理解する方が適当であると言える。

ここまでみてきた場所への愛着は、基本的に“人間と場所”との関係を取り上げる切り口として、とくに主な関心が“場所”である地理学や現象学からの流れをくむものと考えることができる。ここで、場所への愛着の定義を整理する上で異なった流れによる定義の一つあげたい。それは“愛着”の対象が養育者から物理的な対象物へと変換できるという考え方であり、愛着の対象に家を想定し、物理的な存在を考慮した定義である。Giuliani (1991) は、家を含む対象物への愛着を“対象が近くに存在する事もしくは近づきやすい事による心理的良好状態と、対象が無い事、遠い事、近づきにくい事による苦痛状態”とし、日常は意識しないが失って初めて気づく絆であるとした。ここでの“場所への愛着”はむしろ“愛着”に源泉があり、養育者と子どもの関係が根底にあるBowlby (1969/1973/1980) やAinsworth et al. (1978) の対人面での愛着理論を基に発展したと考えられる。先にこれを異なった流れと称したが、もともと場所への愛着に関する研究はFried (1963) によるボストンのウエスト・エンド地区で移住を余儀なくされた居住者の悲哀反応への注目が大きな契機となっており、失って意識される絆という点ではBowlbyやAinsworthらの愛着理論との関連も深い。

以上、“場所への愛着”を定義上整理したものをTable 1 に示す。基本的な定義として共通項にあげられるのが

Table 1 場所への愛着の定義

(1) 個人と場所との間の(肯定的で)感情的な絆もしくはつながり
○経験の場としての役割機能を持つ場所と人間とを感情的に結びつける, 地理上の場所に関する一連の感情 (Rubinstein & Parmelee, 1992)
○人間が特定の物理的環境に結びつく現象 (Vorkinn & Riese, 2001)
○認識や好み, 判断を越える人間と景観との情緒的な関係性 (Riley, 1992) <Low & Altman (1992) も○場所への愛着は, 場所に関する感情や情動, 知識や信念, 行動や行為の相互影響を含んでいる (p 5) と述べている (See Jorgensen & Stedman (2001))>
○物理的環境との複雑な感情的つながり (Kaltenborn, 1997)
○人々と特定の場所との間の感情的な絆もしくはつながり (Hidalgo & Hernández, 2001)
○個人と住環境との間の肯定的な感情の絆もしくはつながり (Shumaker & Taylor, 1983)
○個人もしくは集団とその環境との間で発達する肯定的で感情的な絆 (Altman & Low, 1992 ; See Mesch & Manor, 1998)
(2) (1) に時間や認知, 行動, 文化の側面が加わった定義
○肯定的に体験された絆を含み, 人と環境との行動・感情・認知的なつながりから時間を経て発達する (Brown & Perkins, 1992)
○心理的には特定の場面や環境に対する個人の認知的・感情的連結であり, 文化的には空間や土地の片隅での体験を文化的に意味深く共有されたシンボル — すなわち“場所” — に変形させるもの (Low, 1992)
○人間が家族的, 共同体的, 民族的, 文化的な絆を近所の人と共有して住んでいる場所に対して育む人間と場所との関係性 (Fried, 2000)
(3) (1) に心地よさ, 安心感が加わった定義
○個人と居住環境との間の肯定的なつながりで, そのつながりは心地よさや安心感を生む (McAndrew, 1998)
○個人や集団のアイデンティティを生む過程で, 近接する状況で安心感や心地よさを育む (Sugihara & Evans, 2000)
(4) 各研究の目的により, 変数の一部として操作的に定義されたもの
○そこに住もうとする程度 (Hull, 1992)
○個人がどの程度特定の環境セッティングに価値をおき同一化しているか (Williams & Roggenbuck, 1989 ; See Moore & Graefe (1994))
(5) 愛着理論の対象に家を想定し物理的な存在を考慮した定義
○家を含む対象物への愛着: 対象が近くに存在する事もしくは近づきやすい事による心理的良好状態と対象が無い事, 遠い事, 近づきにくい事による苦痛状態 (Giuliani, 1991)

“個人と場所との間の肯定的で感情的なつながり”であり, 感情面に加えて認知, 行動, 文化の側面も含まれ, また, 基本的な効果として心地よさや安心感が育まれるのが場所への愛着であると言える。

1.2 場所への愛着の諸側面

更に, これらの研究ではどのようなことが明らかになったのであろうか。

Gerson et al. (1977) は住区への愛着が多次元的であるとし, 4つの形式を取り上げた。教会や学校などの施設との結びつき, 近所の住人や地域の組織との関与, 近所に住む友人や親戚の存在, 近隣に関する肯定的な感情としてまとめられ, 更にこれらに人生周期の各段階が複雑に絡み合っているとした (Shumaker & Taylor, 1983)。多

くの研究が“場所への愛着”を単一の構成要素として扱ったのに対し, 場所への愛着そのものへのアプローチを試みた例としてあげられる。また, Riger & Lavrakas (1981) はコミュニティへの愛着により, 都市の住民を2次元で分類する類型論を導き出した。アメリカの都市に住む1620人の住人に対する電話インタビューによる回答から, 居住期間や家の所有, 同じ場所への居住予定などの“根づき²⁾ (rootedness)”と近隣の一員である実感, 住人と外部者との判別能力, 近隣で知っている子どもの数などの“連帯²⁾ (bondedness)”という因子を得, それぞれの得点の高低を交えたクロス表から“若年移動

²⁾ 日本語訳についてはクルバット E. 著, 藤原武弘 (監訳), 『都市生活の心理学—都会の環境とその影響—』を多く参考にした。

者 (young mobiles)” “若年参加者 (young participants)” “孤立者 (isolates)” “確立した参加者 (established participants)” という4つの都市型住人カテゴリーを設けた。同じようにTaylor et al. (1985) は“根づきと関与 (rootedness and involvement)” という因子と“地域との絆 (local bond)” という因子を得ている (Hidalgo & Hernández, 2001)。これらの因子をHidalgo & Hernández (2001) は物理的な愛着次元と社会的な愛着次元として解釈し、愛着の対象となる空間スケールによって家、近隣、都市の3領域との組合せで場所への愛着の程度を検討している。177人へのインタビューからは、家と都市と比較すると近隣への愛着の程度が最も低く、社会的な愛着の方が物理的な愛着よりも強く、また、その他に場所への愛着は女性のほうが強く、高齢の方が強くなるという結果が得られている。

ここまででもいくらか触れられているように、場所への愛着に関して様々な角度からの研究がある中で、早くから居住年数との関連は強く見い出されていた。概して同じ地域に長期間住むほど、より強い愛着を感じるようになる (Hunter, 1975; Kasarda & Janowitz, 1974他) ように、場所への愛着と時間という側面は切り離せない。また、発達段階もしくはライフサイクルと場所への愛着が関連づけられる研究も多くみられ (Giuliani, 1991; Chawla, 1992; Rubinstein & Parmelee, 1992; Hay, 1998; 他)、場所への愛着には時間軸の考慮が重要であることが分かる。

1.3 具体的項目にみられる場所への愛着体験の核

それでは、実際に場所への愛着はどのようにしてその強弱や質が導き出されているのであろうか。

前々項で述べたように、“場所への愛着”の定義で根幹をなしているのは“人間と場所との間の感情的なつながり”である。この絆・つながりを浮き彫りにする方法としては現象学的アプローチが多く用いられている (Giuliani, 1991; Altman & Low, 1992; Hay, 1998; Gustafson, 2001; 他)。なぜ場所への愛着は現象学的アプローチが手法としてとられることが多いのであろうか。ここに場所への愛着研究の特徴がいくらかうかがえる。Low & Altman (1992) はこのことについて次のように述べている。

- (1) もともと場所への愛着への学術的な興味は現象学から始まっている。
- (2) 場所への愛着は人間と場所との結びつきの諸側面を結合させた複雑な現象であるという基本的な想定があり、分離できない統合された概念として受け入れられている。
- (3) よって相互交流論transactional perspectivesや状況論contextual orientations, 現象学的アプローチやその他の

の全体論holistic philosophical viewと両立する。

もちろん、計量的な研究がないわけではない。Kasarda & Janowitz (1974) やGoudy (1982) は計量的な研究によって高齢の居住者ほど地元への強い愛着をもつことを示した。Williams, et al. (1992) は場所アイデンティティ (place identity) や場所依存 (place dependence) を場所への愛着の副次的領域とみなし、場所への愛着を測定する13項目の尺度を作成した。Fuhrer, et al. (1993) は3件法の尺度で乗物、家、家の近所に対する愛着と1日や1週間でどの程度移動するかという流動性と共に考察を行っている。また、Harris, et al. (1996) は7-9件法でアパートに対する愛着を測定し、プライベートの調整という観点から検討し、これらを受けてMcAndrew (1998) は地元 (home-towns) への愛着と根づき (rootedness) に関する尺度を作成している。

他にも数量的に場所への愛着が測定された研究があるが、ほとんど全てが独自の尺度を用いていると言える。具体的に使用された愛着項目の内容をここで見ていくこととする。

Riger & Lavrakas (1981) の研究で使われた6項目は、

- (1) 「一般にあなたにとって自分の近隣で見知らぬ人と誰かそこに住んでいる人とを区別することはかなり易しい/難しい」,
- (2) 「あなたは自分が本当に自分の近隣の一部であると感じていると言えますか/単に住む場所以上であると考えますか?」,
- (3) 「近くに住む子どもについてはどうですか? 何人の子どもを名前でも知っていますか? : 彼ら全員/いくらか/何とか少し/誰も知らない」,
- (4) 「あなたは今の近隣に何年個人的に住んでいますか?」,
- (5) 「あなたは自分の家を持っていますか/家を借りていますか?」,
- (6) 「あなたはこの近隣にこの先2年間住む予定ですか?」であり、(1) ~ (3) が第一因子、(4) ~ (6) が第二因子となったため、それぞれ“根づき (rootedness)” “連帯 (bondedness)” と命名された。

Lalli (1992) が行った20項目の都市アイデンティティ尺度の中には一般的愛着次元が設けられていた。(1) 「私にとってハイデルベルグには故郷の感覚がある」,
- (2) 「私は自分のことを‘ハイデルベルグっ子’だと思う」,
- (3) 「私はハイデルベルグで本当に気楽にくつろいでいる (feel really at home)」,
- (4) 「町は私自身の一部のようである」という4項目であり、他の次元である“比較評価” “なじみ深さ” “過去との連続性” “関与度”のうち“なじみ深さ”と“関与度”と高い相関を示した。

Taylor (1996) の地域への愛着と関与度を含む要因では5項目が用意されている。(1) 「あなたはどの程度この近隣に住む場所としての満足感もしくは不満感を抱えていますか?」,
- (2) 「あなたは自分が近隣の一員であると感じていますか? もしくはただ住むだけの場所だと感じていますか?」,
- (3) 「あなたはどの程度自分の近所では

の人と共同体感覚をもっていますか?」, (4)「自分の近隣の一員として、あなたは自分の街区を外れた角付近で起こったことにどれほど責任を感じますか?」, (5)「どの程度あなたは自分の近隣に愛着を感じますか?」という項目が地域への愛着および関与度を表すものとして分析されている。

Jorgensen & Stedman (2001) はSense of Placeを“場所アイデンティティ”“場所への愛着”“場所依存”の下位項目に分け、一要因として場所への愛着要因を測定した。その具体的項目は(1)「私は湖畔の自分の土地や家(lake property)に居るときにリラックスする」, (2)「私は湖畔の自分の土地や家に居るときに一番幸せだ」, (3)「湖畔の自分の土地や家は私のもっとも気に入っている居場所(place to be)だ」, (4)「私は長い間湖畔の自分の土地や家から離れていると、それがなくて本当に寂しい(I really miss my lake property)」というものであった。

Vorkinn & Riese (2001) の地域環境に対する関心についての研究では、地域への愛着に関する5つの異なった質問(1)「n地域は私にとって他の地域よりも大事である」, (2)「n地域を利用することで私はとても楽しくなる」, (3)「私の祖先は長い間n地域を利用してきた」, (4)「n地域はほとんど私の一部である」(ここまではWilliams et al. (1992)を参考に)、と愛着の強さに関して6件法による(5)「全く愛着がない-とても強く愛着を持っている」がなされている。

これらの具体的項目は一覧できるようTable 2にまとめた。上にあげた具体的項目から分かるように、地域への愛着を測定するという目的(もしくは手段として利用すること)は同じであっても、全ての研究で内容が重なる項目はない。比較的重なるのは自分が住区の一部だと感じる感覚(Riger & Lavrakas, 1981, (2); Taylor, 1996, (2))もしくは住区が自分の一部だと感じる感覚(Lalli, 1992, (4); Taylor, 1996, (4); Vorkinn & Riese, 2001, (4))であるが、これもJorgensen & Stedman (2001)ではとりあげられていない。これらの項目は、それぞれが幅広くそれ以前の研究を参考にした上で作成されているが、先に述べたように、基本的には個々の枠組みの中で独立した尺度が作られ、用いられている状態であり、理論的な統合は図りたいと考えられる。ただし、それほど統一を見ない具体例の中で“自分が住区の一部だと感じる感覚”もしくは“住区が自分の一部だと感じる感覚”はかなり一致してみられる事から、場所への愛着の体験的な現象としては、このように自己と場所との境界が弱まり、自己と場所との一体感を感じる体験が核を成していると考えられる。

2. 場所アイデンティティとの関連性

2.1 場所アイデンティティの定義と概念発達

それではここで、自己と場所という観点から考えるためにも、場所への愛着と類繁に並ぶ“場所アイデンティティ(place identity)”について少しばかり触れておこう。

場所アイデンティティという言葉で広く知られるようになったのはProshansky et al. (1983)の論文“Place-identity: physical world socialization of the self”からである。その数年前からとりかかっていた場所アイデンティティの概念を公式にまとめたものであり、それ以前は都市型場所アイデンティティ(urban place-identity/urban-place identity)について比較的詳しく述べられていた(Proshansky, 1978)ことから、初期に想定されていた場所アイデンティティは都市居住型であったことがうかがえる。Proshansky et al. (1983)によると、場所アイデンティティとは“自己アイデンティティの下部構造であり、個々人が生きている物理的世界に関する認知”であると操作的に定義されている。その後、場所アイデンティティは“物理的環境やその一部分を構成している認知であり、その中もしくはそれと共に個々人が自分の自己の感覚を保持する体験を調整する”ものであると定義されている(Korpela, 1989)。Cuba & Hummon (1993)はこのことを“私は誰?”という問いに対して‘私はどこにいるのか?(Where am I?)’や‘私はどこに所属しているのか?(Where do I belong?)’という問いに対する答えで答えること”であり、“環境の意味を使って象徴的にもしくは状況に合わせたアイデンティティに自己を解釈すること”であると述べている。

2.2 場所アイデンティティと場所への愛着

Proshansky et al. (1983)によると、場所アイデンティティには肯定的側面と否定的側面があり、肯定的側面は個人の場所への所属性へとつながっており、否定的側面としては場所への嫌悪へ結びつきやすいと論じている。個人と場所との感情的な結びつきという点では場所への愛着が場所アイデンティティの主要な基礎部分であるとしても、場所アイデンティティは否定的側面も有しており、また快適な結びつきであるとされる場所への愛着と比較して場所アイデンティティには所属感覚が含まれている点において、両者は異なるものである(Korpela, 1989)とされる。この差異はTwigger-Ross & Uzzell (1996)によって感情的な住区への愛着がアイデンティティを発達させ、アイデンティティ・プロセスを保つ機能として働いていると考えられ、検証されている。

3. 場所の意味(sense of place)と発達の視点

3.1 場所の意味

Hay (1998)は、あくまで個人的な場所への愛着と比べ、先祖や社会との関連まで含めたより広い概念として

Table 2 地域への愛着の測定で具体的に使用された愛着項目

Riger & Lavrakas (1981) の研究で使われた6項目
(1) 「一般にあなたにとって自分の近隣で見知らぬ人と誰かそこに住んでいる人とを区別することはかなり易しい／難しい」
(2) 「あなたは自分が本当に自分の近隣の一部であると感じていると言えますか／単に住む場所以上であると考えますか？」
(3) 「近くに住む子どもについてはどうですか？何人の子どもを名前で知っていますか？：彼ら全員／いくらか／何とか少し／誰も知らない」
(4) 「あなたは今の近隣に何年個人的に住んでいますか？」
(5) 「あなたは自分の家を持っていますか／家を借りていますか？」
(6) 「あなたはこの近隣にこの先2年間住む予定ですか？」
※ (1)～(3)が“根づき (rootedness)”, (4)～(6)が“連帯 (bondedness)”
Lalli (1992) が行った20項目の都市アイデンティティ尺度の中の一般的愛着次元4項目
(1) 「私にとってハイデルベルグには故郷の感覚がある」
(2) 「私は自分のことを‘ハイデルベルグっ子’だと思う」
(3) 「私はハイデルベルグで本当に気楽にくつろいでいる」
(4) 「町は私自身の一部のようである」
Taylor (1996) の場所への愛着要因5項目
(1) 「あなたはどの程度この近隣に住む場所として満足感もしくは不満感を抱えていますか？」
(2) 「あなたは自分が近隣の一員であると感じていますか？もしくはただ住むだけの場所だと感じていますか？」
(3) 「あなたはどの程度自分の近所で他の人と共同体感覚をもっていますか？」
(4) 「自分の近隣の一員として、あなたは自分の街区を外れた角付近で起こったことにどれほど責任を感じますか？」
(5) 「どの程度あなたは自分の近隣に愛着を感じますか？」
Jorgensen & Stedman (2001) がSense of Placeの測定時に一要因として使用した場所への愛着要因の具体的項目
(1) 「私は湖の所有地に居るときにリラックスする」
(2) 「私は湖の所有地に居るときに一番幸せだ」
(3) 「私の湖の所有地は私のもっとも気に入っている居場所だ」
(4) 「私は長い間自分の湖の所有地から離れていると、そこがなくて本当に寂しい」
Vorkinn & Riese (2001) の地域環境に対する関心についての研究で、地域への愛着に関する5つの異なった質問
(1) 「n地域は私にとって他の地域よりも大事である」
(2) 「n地域を利用することで私はとても楽になる」
(3) 「私の祖先は長い間n地域を利用してきた」
(4) 「n地域はほとんど私の一部である」
(5) 愛着の強さ「全く愛着がない—とても強く愛着を持っている」(6件法)

“場所の意味 (sense of place)” を用い、その発達を検討している。彼は、“場所の意味研究は、個々人と家や職場との絆を測定するのに加え、場所に対する共同体や祖先のつながりはもちろん、主観的な質（個人的な意味を創造する場所の意味づけ）や地理学的な領域での社会的文脈にも価値をおくことから、場所への愛着研究よりも広がる”と述べている。同じようにJorgensen & Stedman (2001) も人間と空間的配置との関係を表す概念の中で場所の意味が最も全般的であるとし、場所アイデンティティ、場所への愛着、場所依存を場所の意味の構成要素として位置づけている。しかしながら、この思想的な相

違は研究上の実質的な調査内容で違いをみせる程には反映されておらず、また、場所への愛着をテーマに設定する側からの相違としてはあげられていない。

3.2 Hayの発達の視点に含められた文化的時間軸

上記のような理由の下、ここで大まかに場所の意味を場所への愛着とほぼ読み替えられるものとしてHay (1998) が場所の意味を発達的に検討した研究を紹介することとする。彼は前項で紹介したように、場所への愛着よりも包括的な人間と場所との関係を表す術語として場所の意味に強い強調を行っており、様々な居住形態を

設定した協力者を面接対象者に求めているが、具体的なアプローチとしては個人個人に対する面接であり、場所への愛着に関する研究で行われている内容と大きな違いはみられない。場所への愛着を考える上で重要な貢献を成す事は確かである。

Hay (1998) は比較的居住流動性が低く、祖先からのつながりが現在の住区にある居住者が多いニュージーランドのBanks Peninsulaで、様々な居住形態や年齢段階を含む270名の面接を行い、場所の意味の発達ステージを以下のような5つに分類した。

- (1) 表面的な (superficial) つながり：旅行者、短期滞在者。他の土地に強い感情を持つが、Banks Peninsulaには景観に対してなど審美的な感情を持つ。Peninsulaに対する絆は弱い、もしくはみられない。根づきの感覚や場所への愛着は見られず、表面的な場所の意味が表れるのみである。
- (2) 部分的な (partial) つながり：コテージ利用者、子ども。発達しつつあるがまだ弱く、部分的にだけ発達する。一時的な居住者は別に住区があるし、社会活動に参加していない。子どもの場合は自分で選択して住み続けると意味が発達する。
- (3) 個人的な (personal) つながり：そこが故郷でない新規居住者。5～10年間は住み続けないとコミットしない。10年ほど経ってから地域の知識や社会的なつながりが増え、Peninsulaに参加・関与 (commit) しているように感じ始める。40年以上住むと、先祖がその場所にいなくても場所の意味の発達段階は最高点に達する。
- (4) 先祖代々の (ancestral) つながり：ルーツのある居住者。Peninsulaで生まれ育った高齢者は自分達の場所に対して強い感情を持つ。高齢になるまでPeninsulaで過ごす、その土地の“一部”であると感じ、場所の意味の発達段階で最高点に達する。ここで生まれた10代の居住者はその前にこの土地に移ってきた親よりも短期間しか住んでいないのにも関わらず、“内部者”としてより強く感じている事がある。
- (5) 文化的な (cultural) つながり：ルーツも精神的な絆も両方ある土着の居住者。文化的な深い意味でまさにその場所の一部である。個人的な場所の意味をもつ居住者はPeninsulaに親戚関係がなく、自分達自身を頼りに場所の意味を発展・維持させなければならないが、ここで生まれ育った居住者は先祖から前もって引き受けた場所の意味を有している。若いうちは積極的に自分達の文化について学ぼうとし、長老になると自分達の場所は感情的に自分達の一部として感じられるようになる。

更にHayはこのように5つの居住形態に年齢段階を組

み合わせ、場所の意味の発達タイプをFigure 1のように表した。これを場所への愛着研究の一部と位置づけるならば、Hay (1998) の貢献とは、従来は個人史の中での時間軸に限られてた場所への愛着研究に、文化的時間軸を取り込んだ所にあるだろう。ただしここで文化的時間軸は個人の中で意識されている自身の文化的背景を一つの説明変数として扱っていると考えられることも可能であり、更なる理論的発展には動的なとらえ方が必要とされるであろう。すなわち、Hay (1998) の横断的分析法に対し、縦断的分析法を可能な様式で取り入れることや、学校などの公的場面でも家庭などの私的場面でも行われて来たであろう環境教育の変遷を含む時代背景を取り入れることが、今後の研究の方向性として考えられる。

4. 結 び

本稿では、“場所への愛着”“地域への愛着”“コミュニティへの愛着”“地元への愛着”など、様々な形で注目をされている住区への愛着に関して可能な限り先行研究の概観・整理を試みた。愛着の対象が地理的な所在に関わるという点では同じであるが、その空間スケールや強調される意味において私たちが日常生活する“場所”の多次的なとらえ方を反映し、共通の研究パラダイムは見えにくいものとなっている。その中で住区への愛着では“人間と場所との間の感情的なつながり”という定義が広く使われており、時に認知面、行動面、文化面、及び場所への愛着の効果として心地よさや安心感が定義に含まれていた。しかし、具体的に各研究で扱われている内容は少しずつ異なっており、ここに住区への愛着に関する研究には未だ用語の氾濫と内容の不統一、有用な領域前進のための足がかりの脆弱さという問題点がうかがえる。それでも今回取り上げられた具体項目からは、場所への愛着は自己と場所との境界が弱まり一体感を感じる現象を体験することが重要な感覚であると示唆された。

また、本稿で展開した文献展望には日本における住区への愛着研究は含まれていない。住区への愛着という概念自体がアメリカ社会の高い流動性と深く関わる問題意識を含んで発展したという経緯をもち、日本ではほとんど研究が行われてこなかった。しかしながら、これからの日本社会も流動性が高まる状態が予測され、過渡期にある現在だからこそ、住区への愛着研究が必要であると考えられる。また、流動性が高まりつつある社会状況からの必要性和同時に、地域への関わりという点で欧米型の場所への愛着とは異なった社会背景を持つとも考えられ、文化的背景を鑑みた検討が求められる。自治体レベルでは「愛着の持てるまちづくり」などのフレーズが掲げられている昨今、今後はこのような観点から日本における住区への愛着の検討が期待される。

最後に、これらの問題点を補うには狭い視点に留まら

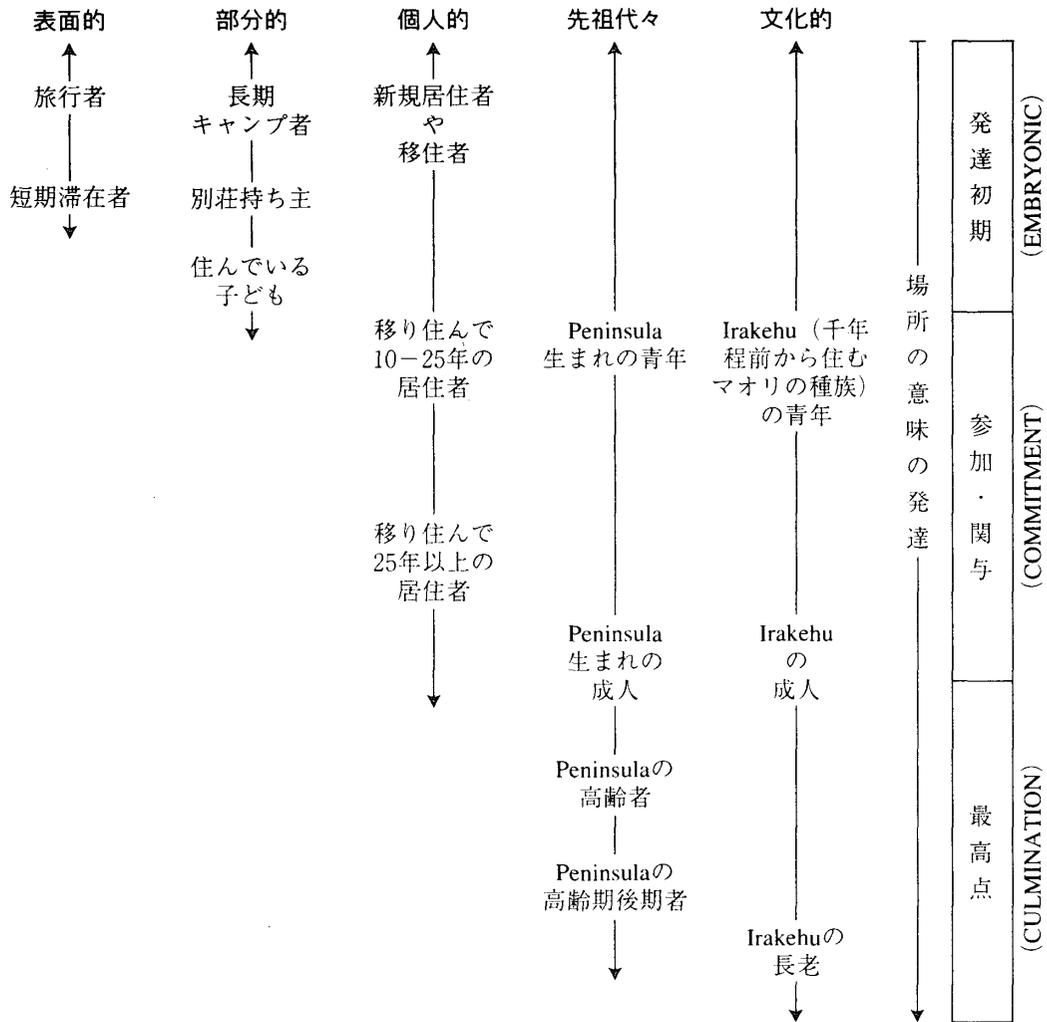


Figure 1 居住者の場所の意味 (sense of place) の発達タイプ (Hay, 1998)

ず、重なるの可能性をもった広い領域での位置づけを試みる必要がある。“場所アイデンティティ”や“場所の意味”などの周辺領域には多大な重複がみられ、また関連する諸側面の中でも、場所への愛着と時間という側面は切り離せず、動的なとらえ方が重要となる。Hay (1998) のように直接的に時間軸を扱った研究はそう多くないが、時間的側面が無視されてきたわけでもない。多くの研究で定義こそはされなくとも、場所への愛着に関する記述には「発達する」や「育む」「生まれる」といった表現が含まれている (定義に含まれるものはTable 1内の Brown & Perkins, Fried, McAndrew, Sugihara & Evans) ように、むしろ重要な側面として触れられている。場所への愛着が単なる場所の好みや価値判断を越える (Riley, 1992他) というこの意味がこの時間軸と共に理解することに備わっているとも考えられる。今後、住区への愛着の本質に迫ろうとするならば、時間軸と愛着の質について丁寧な検討を行うことが求められる。

文 献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., and Wall, S. 1978 *Patterns of attachment. A Psychological Study of the Strange Situation*. N.J.: Lawrence Erlbaum.

Altmen, I. and Low, S. M. (Eds.). 1992 *Place Attachment*. New York: Plenum Press.

Bowlby 1969 *Attachment and loss. Vol. 1, Attachment*. New York: Basic Books.

Bowlby 1973 *Attachment and loss. Vol. 2, Separation: Anxiety and Anger*. New York: Basic Books.

Bowlby 1980 *Attachment and loss. Vol. 3, Loss: Sadness and Depression*. New York: Basic Books.

Brown, B. B. and Perkins, D. D. 1992 Disruptions in place attachment. In Altmen, I. & Low, S. M. (Eds.), *Place Attachment*. New York: Plenum Press. Pp. 279-304.

ボルノウ O. F. 大塚恵一・池川健司・中村浩平 (訳)

- 1978 人間と空間 せりか書房
(Bollnow, O. F. 1963 *Mensch und Raum*. W. Kohlhammer GmbH, Stuttgart.)
- Chawla, L. 1992 Childhood place attachment. In Altmen, I. & Low, S. M. (Eds.), *Place Attachment*. New York: Plenum Press. Pp. 63-86.
- Cuba, L. and Hummon, D. M. 1993 Constructing a sense of home: place affiliation and migration across the life cycle. *Sociological Forum*, **8**, 4, 547-572.
- Fischer, C. S. 1977 Networks and places: social relations in the urban setting. New York: The Free Press.
- Fried, M. 1963 Grieving for lost home. In L. J. Duhl (Ed.), *The Urban Condition: People and Policy in the Metropolis*, New York: Simon & Schuster.
- Fried, M. 2000 Continuities and discontinuities of place. *Journal of Environmental Psychology*, **20**, 193-205.
- Fuhrer, U., Kaiser, F. G., and Hartig, T. 1993 Place attachment and mobility during leisure time. *Journal of Environmental Psychology*, **13**, 309-321.
- Gerson, K., Stueve, C. A., & Fischer, C. S. 1977 Attachment to place. In C. S. Fischer, R. M. Jackson, C. A. Stueve, K. Gerson, L. M. Jones, and M. Baldassare. (Eds.), *Network and places: Social relations in the urban setting*. New York: Free Press.
- Giuliani, M. V. 1991 Towards an analysis of mental representations of attachment to the home. *The Journal of Architectural and Planning Research*, **8**, 2, 133-146.
- Goudy, W. J. 1982 Further considerations of indicators of community attachment. *Social Indicators Research*, **11**, 181-192.
- Gustafson, P. 2001 Roots and routes: exploring the relationship between place attachment and mobility. *Environment and Behavior*, **33**, 5, 667-686.
- Harris, P. B., Brown, B. B., and Werner, C. M. 1996 Privacy regulation and place attachment: predicting attachments to a student family housing facility. *Journal of Environmental Psychology*, **16**, 287-301.
- Hay, R. 1998 Sense of place in developmental context. *Journal of Environmental Psychology*, **18**, 5-29.
- Hidalgo, M. C. & Hernández, B. 2001 Place attachment: conceptual and empirical questions. *Journal of Environmental Psychology*, **21**, 273-281.
- Hull, R. B. 1992 Image congruity, place attachment and community design. *Journal of Architectural and Planning Research*, **9**, 3, 181-192.
- Hunter 1975 The loss of community: an empirical test through replication. *American Sociological Review*, **39**, 537-552.
- Jorgensen, B. S. and Stedman, R. C. 2001 Sense of place as an attitude: lakeshore owners attitudes toward their properties. *Journal of Environmental Psychology*, **21**, 233-248.
- Kaltenborn, B. P. 1997 Nature of place attachment : A study among recreation homeowners in southern Norway. *Leisure Sciences*, **19**, 175-189.
- Kasarda, J. and Janowitz, M. 1974 Community attachment in mass society. *American Sociological Review*, **39**, 328-339.
- Korpela, K. M. 1989 Place-identity as a product of environmental self-regulation. *Journal of Environmental Psychology*, **9**, 241-256.
- クルパット E. 藤原武弘 (監訳) 1994 都市生活の心理学—都会の環境とその影響— 西村書店
(Krupat, E. 1986 *People in Cities: The urban environment and its effects*. Cambridge University Press.)
- Lalli, M. 1992 Urban-related identity: Theory, measurement, and empirical findings. *Journal of Environmental Psychology*, **12**, 285-303
- Low, S. M. 1992 Symbolic ties that bind: Place attachment in the plaza. In Altmen, I. & Low, S. M. (Eds.), *Place Attachment*. New York: Plenum Press. Pp. 166-185.
- Low and Altman, 1992 Place attachment: a conceptual inquiry. In Altmen, I. & Low, S. M. (Eds.), *Place Attachment*. New York: Plenum Press. Pp. 1-12.
- McAndrew, F. T. 1998 The measurement of 'rootedness' and the prediction of attachment to home-towns in college students. *Journal of Environmental Psychology*, **18**, 409-417.
- Mesch, G. S. and Manor, O. 1998 Social ties, environmental perception, and local attachment. *Environment and Behavior*, **30**, 4, 504-519.
- Moore, R. L. and Graefe, A. R. 1994 Attachment to recreation settings: the case of rail-trail users. *Leisure Sciences*, **16**, 17-31.
- Proshansky, H. M. 1978 The city and self-identity. *Environment and Behavior*, **10**, 2, 147-169.
- Proshansky, H. M., Fabian, A. K., and Kaminoff, R. 1983 Place-identity: physical world socialization of the self. *Journal of Environmental Psychology*, **3**, 57-83.
- Riger, S. and Lavrakas, P. L. 1981 Community ties: patterns of attachment and social interaction in urban neighborhoods. *American Journal of Community Psychology*, **9**, 1, 55-66.
- Riley, R. B. 1992 Attachment to the ordinary landscape. In Altmen, I. & Low, S. M. (Eds.), *Place Attachment*. New York: Plenum Press. Pp. 13-35.
- Rohe, W., M. and Basolo, V. 1997 Long-term effects of homeownership on the self-perceptions and social interaction of low-income persons. *Environment and Behavior*, **29**, 6, 793-819.
- Rubinstein, R. L. and Parmelee, P. A. 1992 Attachment to place

- and the representation of the life course by the elderly. In Altman, I. & Low, S. M. (Eds.), *Place Attachment*. New York: Plenum Press. Pp. 139-163.
- Shumaker, S. A. and Taylor, R. B. 1983 Toward a clarification of people-place relationships: a model of attachment to place. In N. R. Feimer & E. S. Geller (Eds.), *Environmental Psychology: directions and perspectives*. Praeger, New York. Pp. 219-251.
- Sugihara, S. and Evans, W. E. 2000 Place attachment and social support at continuing care retirement communities. *Environment and Behavior*, **32**, 3, 400-409.
- 田村 明 1987 まちづくりの発想 岩波新書
- Taylor, R. 1996 Neighborhood responses to disorder and local attachment: the systemic model of attachment, social disorganization, and neighborhood use value. *Sociological Forum*, **11**, 1, 41-74.
- Taylor, R. B., Gottfredson, S. D., and Brower, S. 1985 Attachment to place: discriminant validity, and impacts of disorder and diversity. *American Journal of Community Psychology*, **13**, 525-542.
- Twigger-Ross, C. L. and Uzzell, D. L. 1996 Place and identity processes. *Journal of Environmental Psychology*, **16**, 205-220.
- Vorkinn, M. and Riese, H. 2001 Environmental concern in a local context: The significance of place attachment. *Environment and Behavior*, **33**, 2, 249-263.
- Williams, D. R. and Roggenbuck, J. W. 1989 Measuring place attachment: some preliminary results. Paper presented at the Symposium on Outdoor Recreation Planning and Management, NRPA Symposium on Leisure Research, San Antonio, TX.
- Williams, D. R., Patterson, M. E., Roggenbuck, J. W., and Watson, A. E. 1992 Beyond the commodity metaphor: examining emotional and symbolic attachment to place. *Leisure Sciences*, **14**, 29-46.
- ウインダーマン A. 中村秀之 (訳) 1995 複数の世界がぶつかる所—LAについての考察— 多木浩二・八束はじめ (編) 10+1 (Ten Plus One) No.4 (特集: ダブルバインド・シティーコミュニティを越えて— INAX出版 Pp. 134-149.
(Winderman, A. 1995 Where Worlds Collide - Musings on LA In K. Taki & H. Yatsuka (Eds.), *10+1 (Ten Plus One)*, **4**, 134-149.)